
猫の奇跡

逢河 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の奇跡

【Nコード】

N7667R

【作者名】

逢河 奏

【あらすじ】

絶望と衰退だけが世界を満たしても、猫は奇跡を信じていた。だから猫は歩いて歩いて歩いた。大好きな人間がくれた大好きなあの食べ物求めて。

これは猫の奇跡を求める行進曲。その、序章である。

※この作品はAmebaブログ「ネクラな魔法使いのぼやき」にて掲載したものを多少修正して掲載しております。

猫は奇跡を信じた。

生物のほとんどが死んで自分だけが生きているこの状況の中でも、きつと美味しいキャットフードがあることを。

だから猫は歩いた。

倒れた電柱を飛び越え、干からびた人間だったものを乗り越え、電車は来ないとわかつている踏み切りを、でもそわそわと辺りを見渡して耳を澄ませてから早足で渡った。

軒先にぶら下がっている永遠に主の帰らない鳥籠を覗き込み、原形をとどめていない魚の残骸の匂いを好きなだけ嗅ぐ。

誰も生きていない商店街は不気味だが、猫には関係ないことだった。迷わず目的の店に辿り着いた猫は、しかし直ぐに愕然とした。扉を開けてくれる人間がいないのだ。薄暗い店内に並ぶ、猫の写真がプリントされ、でっぴりと太った袋が透明の扉越しに見える。

だがそれだけだった。猫は扉を引つ掻き、店の外周を一巡りし、窓という窓に飛び掛かったが芳しい成果はあがらなかった。

猫は尻尾を垂らしてとぼとぼと、再び歩き出した。今度は宛もな

く。
少し進んだ時だ。突然何かが崩れ落ちたような音が轟いて、猫は毛を逆立てた。猫は暫くきよろきよろと辺りを確認し、耳を動かすと駆け出した。目的をまた見付けたからだ。

猫の耳に届いたのは微かな人の声だった。

猫は屋根がずり落ち、壁が崩れた建物にそろそろと入っていった。奥へ奥へと進むに連れ、雑音混じりの小さな声ははっきりしてくる。猫はたまらず走り出すと朽ちた柵の残骸に足をかけ、音の出所を覗いた。

あつたのは壊れかけのテープレコーダーだけだった。

ジーやらガッガという音と一緒に、人が吹き込んだ何かを吐き出している。猫は憮然とした顔で力任せにそれを前肢で叩いた。それが止めだったようで音がぷつりと消える。息を引き取ったテープレコーダーを物悲しげな瞳で猫は見下ろした。

猫は動かない。諦めたように微動だにしない。

不意に、その背後を何かが駆け抜けた。猫の尾がゆらりと動いて、髭はぴくんと跳ねた。猫の中、奥底にある何かが灯った。

猫は身を翻すと本能のままに床を蹴り、腕を振るった。灰色のものはそれを辛うじてかわすと猫が通った道を逆走しだす。猫は気が付けば全力でそれを追い掛けていた。

途中にあつた襖の残骸を獲物がすり抜ければ、猫は考えなしにそのまま突っ込んでいく。幸い朽ちかけていた襖は容易く砕け散り、猫の行く手を阻むことはなかった。

淡い暗闇に猫が躊躇することはない。一對の黄玉は爛々と煌めき、その瞬きは違うことなく灰色を見据えていた。

猫が飛び上がる。

灰色のものは必死に短い手足で前へ進もうとしていたが、無情にも猫のしなやかで凶悪な前肢は、今度こそその背中を正確に捉えていた。

そうして小さな小さな断末魔の声が、世界の隅っこに生まれて消えた。

猫は鼠を押さえつけていた。自分のしたことに疑問があるのか、猫は息を殺して灰色の小動物を見詰めていたが、やがて空腹を思い出したのだった。

そうして猫は思った。

奇跡が起きて、美味しいキャットフードが食べられることを信じた、願った。けれど本当に願った奇跡は、明日も元気に歩き回るための糧を得られることだったはずだ。だからこれは奇跡だ。まだ明日がある。

だから猫は満足そうにナアと鳴いた。

（後書き）

はじめましてお久しぶりです。

ラノベから大いに影響を受けている逢河奏です。なので挨拶も無駄にそれっぽくしてしまいました。

えー、この短編はAmebaブログで掲載したのを四回くらい微妙に修正したものです。大筋は全く変わっていません。

Amebaにあるグルっぱ「【創作小説】ネット上小説を宣伝しよう！」の「テーマ小説書きませんか？」というトピックで挙げられていた“奇跡”というテーマで思い付いたのが、このキャットフード愛な猫が人のいない世界をさ迷う話です。

“奇跡”のつもりで書いたのですが、あまりに伝わりにくそうだったので最後に言い訳気味な説明を入れましたが……未だにカットしたいような気分です。上手く書ければ良いのになぁ。

書きたかったのは多分、最後に満足そうに鳴く猫の一文です。凄いいバッドエンドちっくな案もあったんですが、猫に満足して貰うために、鼠が代わりに生け贄になって貰いました。ごめんよ鼠……。

まあ何はともあれ謎な舞台設定をしてしまったヘンテコな物語をここまで読んでくださりありがとうございました。

もし興味がありましたら、AmebaでID「kanade201」か、ブログ名「ネクラな魔法使いのぼやき」で検索するか、ホームペ「奏でる獣の世界」のリンクから飛べるはずなので、逢河のAmebaにも是非遊びに来てください。

三月十一日の東北地方太平洋沖地震からまだ一週間程しか経っていません。投稿するか迷っていましたが、一応“奇跡”をテーマにしています。誰かがこれを読んでちょっとでも元気が出たらなと思います、投稿してみることにしました。

一人が出来るとは少ないかもしれませんが、一人一人出来ることをして行けたらと思います。

誰かの“奇跡”の一助になればと祈り、後書きを締めさせていただきます。

2011年3月20日 逢河 奏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7667r/>

猫の奇跡

2011年6月18日08時40分発行